

をあげることができる。ここでは3点の出土をみた早期の小型土偶について若干触れておきたい。

3 小型土偶について

本遺跡で注目できる土製品として、早期前半に伴うと思われる小型の土偶が3点出土した。この時期に伴う土偶の出土例は少なく貴重な発見となった。出土地点は20U区に限られており、この地点はSX-026地点として土器・石器ともに濃密に分布していた場所である。土器の項でも触れたが、本地点は早期前半にあたる撚糸文系土器群が主体となっていたため、3点の小型土偶はこれらの土器群に伴うと考えて間違いあるまい。ただ土器群に関していえば、形式的には井草式から花輪台式土器まで検出されているため具体的にどの型式に伴うものかは即断できないというのが実情である。

では次に3点の形状・製作等について観察すると、最も細部についてまで表現されているもの（第82図4）、板状に粘土塊を整形したもの（第82図5・6）とに分類できる。いずれのタイプにも孔が認められ、前者は製作時に穿孔し首部を差込んだような作りである。後者は、穿孔部が整っており明らかに差込み式として製作されたものと思われる。

このような二タイプの土偶は早期前半にみられる特徴的なものであり、房総の地でも以前から知られている^(注1)。このため当該期の土偶については幾つかの論考にも接することができる。これらの文献によれば、穿孔は組み合わせて一体の土偶^(注2)とし、板状の三角形を呈したものを「木の根タイプ」、より具象化されたものを「花輪台タイプ」として分類し、「木の根タイプ」から「花輪台タイプ」への変遷^(注3)が想定されている。この変遷から考えると、本遺跡出土土偶では5・6が前者となり、4が後者に該当するものとなろう。

このような早期前半の撚糸文系土器群に属する土偶は、先の文献では県下で8遺跡が確認されており、それ以後に船橋市小室上台遺跡^(注4)でも「木の根タイプ」が1点出土しており、本遺跡を含めると10遺跡を数えることになる。この遺跡数は、撚糸文系土器が展開する周辺域において卓越した分布状況を示し、初期土偶の様相を鮮明にしつつあるといっても過言ではない。これらの状況を踏まえたうえで初期土偶について考えるならば、撚糸文期の人びとの間では「木の根タイプ」の土偶は既に意識の中に存在し、いわば「定形化」した形態として捉えていたように思われる。これは穿孔を有する板状土偶の中にも乳房を表現する例や組み合わせが想定される土偶では結果的に人の形を形成したものであり、製作目的としたものは「人」であったことは間違いなかろう。明確に人物像を表現した4の土偶は、肉眼観察によると、「赤彩」に近い色彩を器面の一部で視認できた。既に特別視していたような様子さえ窺われる。いずれにせよ土器発生以前においても「岩偶」といったような類似資料が上黒岩洞穴遺跡^(注5)で発見されている。このような事実と本遺跡をはじめとして各所で発見されてきた初期土偶の製作を考えると、土器発生と時を同じくして既に製作されていたとしてもあながち間違いではないように思われる。

なお、人物をかたどった（第82図4）土偶に関しては、その表面に赤彩らしき痕跡が認められたため、赤彩塗布の有無について確認した。方法としては、蛍光X線・SEM-EDS（走査電子顕微鏡）による元素の分析という方法をとった^(注6)。その結果、土偶の表面では明確な痕跡（酸化鉄・水銀等の含有）を認めることはできなかったことを付記しておく。